

「特集 日本人の国民性調査—第 13 次 全国調査の成果—」について

中村 隆[†]・前田 忠彦[†] (オーガナイザー)

2013(平成 25)年秋に、「日本人の国民性調査」の第 13 次全国調査を実施した。凶らずも、その 5 年前の第 12 次全国調査との間に、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を挟むこととなった。

1953(昭和 28)年に実施された第 1 次以降、「日本人の国民性調査」は 5 年ごとに全国調査を実施し、60 年余(戦後昭和期 36 年間とそれにつづく平成期 25 年間)にわたり、統計調査の方法によって日本人の意識(心情や価値観など)の変遷を捉えてきた。この間、1973 年 10 月の第四次中東戦争が引き金となったオイルショック、1991 年からのバブル崩壊があり、これらは自然災害ではなかったが、2011 年の東日本大震災と合わせると、日本社会を大きく変化させる事象がほぼ 20 年ごとにあったといえる(ちなみに、1973 年が第 5 次、1993 年が第 9 次、2013 年が第 13 次全国調査の実施年である)。

東日本大震災の影響をまさに捉えた項目としては#2.30g「不安感 原子力施設の事故」がある。「非常に感じる」と「かなり感じる」を足した割合は、1990 年代後半から減少傾向にあり 2008 年には 45%であったが、2013 年には 65%と逆方向に 20 ポイント跳ね上がった。他に#9.1「日本人の性格(長所)」の項目で「礼儀正しい」や「親切」が 2013 年に上昇して過去最高となったことも目につく(それぞれ 2008 年から 17 ポイントおよび 19 ポイント上昇して 77%と 71%に)。ただし、これらの長所の上昇は第 12 次(2008 年)以前に始まっており、東日本大震災における日本人の姿を見聞きして拍車がかかったのであろう。

その他にも変化が認められる項目がいくつかあるが、それらが東日本大震災の影響によるものかどうかは、長期的視野の下での 5 年に一度の継続調査である「日本人の国民性調査」に問うのは時期尚早かもしれない。ここでは備忘として、第 13 次調査実施の翌年の 2014 年 10 月 30 日に行った文部科学省記者会における記者発表の資料から、その見出しだけを以下に記しておく。

1. 日本人の長所として「礼儀正しい」「親切」が過去最高
2. もう一度生まれかわるとしたら「日本」に
3. 生活水準～日本を再評価も、自身は「変わらない」が最多
4. 「努力しても報われない」が増加
5. 蔓延する「いらいら」
6. 若年層で「わずらわしさを避けて、平穏無事に」が拡大
7. 再び楽観に転じ始めた将来の見通し
8. その他の特徴的な結果
 - a. 3 人に 2 人が原子力施設の事故に対して不安感
 - b. 一番大切なものは「家族」
 - c. 職場の人間関係観は伝統回帰へ
 - d. 女性の「楽しみは女が多い」が増加

この記者発表資料の内容および「日本人の国民性調査」の集計結果等は、統計数理研究所の国民性調査のホームページ (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>) で見ることができる。具体的には下記のページにある。

「第 13 次調査結果のポイント」 (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/page2/index.html>)

「第 12 次調査結果のポイント」 (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/page3/page7/index.html>)

「集計結果」 (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/index.htm>)

また、第 13 次全国調査の結果を一方の端点とし、これまでの調査結果の変化を概観したものとして中村・前田 (2015) がある。

さて、今回の特集は以下の 5 編の論文からなる。

まず第 1 の吉野論文「意識の国際比較可能性の追求のための『文化多様体解析』」は、1970 年代から国民性調査を展開して併走を始め今日まで積み重ねてきている一連の国際比較調査で得られた知見をレビューしたものである。国際比較調査群の中にあつて「日本人の国民性調査」は太い縦糸となっており、国際比較のパラダイムである“文化多様体解析”にとつてもちろん欠かすことのできない存在である。統計数理研究所における国際比較調査の成立と経緯のみならず、「日本人の国民性調査」の成立と経緯についても触れられている(国民性調査の成立と経緯については、『統計数理』の国民性調査特集における坂元慶行統計数理研究所名誉教授によるオーガナイザーの言(坂元, 1995, 2000, 2005)もあるので参考にされたい)。

第 2 の松岡・前田論文「『日本人の国民性第 13 次全国調査』の欠票分析：個人・地点・調査員の特性と調査回収状況の関連」は、個人・地点・調査員特性と回収状況の関連を実証的に検討したものである。国民性調査には大きく 3 つの目的、日本人の意識動向を示す結果数値の獲得、標本調査法や社会調査法の研究開発、調査データを分析する統計手法の研究開発があるが、この内の 2 番目の目的に関する論文である。第 13 次全国調査、調査員事後アンケート、国勢調査のデータを用い、個人と地点の 2 水準を考慮する多項ロジット・マルチレベル分析を行っている。調査主体が制御可能なのは調査員だけともいえるが、今後の回収率向上に寄与する結果を得ている。

つづく 3 編は、近現代の日本人の意識を巡る問に対して、国民性調査のデータを分析することにより答えようとしたものである。それぞれ〈ボランティア活動に対する参加態度〉、〈努力有効感〉、〈信頼感〉を扱っている。

松本論文「ボランティア活動に対する参加態度と社会観の関係性—第 12 次・第 13 次の日本人の国民性調査から—」は、多項ロジスティック回帰分析を適用し標題に掲げたことを検討したものである。ここで“社会観”は、自由競争支持派と弱者保護支持派のそれを指している。両派によりボランティア活動への参加態度の決定のメカニズムが異なること、また 2008 年から 2013 年への変化として自由競争支持派が増加しその決定メカニズムにも変化が見られることなどを見いだしている。#2.35 ‘ボランティア活動’の項目は著者の推薦もあつて取り入れられた質問項目であり、国民性調査でその推移を追跡するとともに、ボランティア活動を中心とする社会観の変化に迫る(国際比較調査を含む)調査研究が今後は期待される。

朴・前田論文「誰が努力は報われると感じているか—現代日本人の〈努力有効感〉に関する分析—」は、努力と成果との関係について、〈努力有効感(＃7.38 ‘努力は報われるか’)〉のロジスティック回帰分析を行うことにより追究したものである。当該項目の＃7.38 は第 8 次(1988 年)調査で用いられたが、近年における変化を予想して第 13 次(2015 年)調査で 25 年ぶりに復活させた。日本人における‘努力していればいつかは必ず報われると思う’という考え方は 7 割ほどの多数派ではあるものの、この 25 年で退潮傾向にあること、またこの〈努力有効感〉に対して、格差意識、社会的孤立の自覚、自国に対する愛着、公平感などが影響していることを示している。

稲垣・前田論文「潜在クラス分析による『日本人の国民性調査』における信頼の意味とその時代

的変遷の検討」は、「信頼」の概念の多様さのため用いる調査項目によって異なる概念が抽出されるという問題がある中、第6次から第13次(第8次を除く)の国民性調査の信頼感項目データに対して潜在クラス分析を適用し、〈用心深さ〉、〈一般的信頼〉、〈不安(安心)〉という信頼感にかかわる3つの潜在クラスを抽出したものである。時代の経過とともに〈用心深さ〉が減少し、現在では〈一般的信頼〉の割合が最も高くなってきたことを示している。35年にわたる現代日本人の信頼感の変遷を描画するものとして評価できるであろう。国際比較調査と関連づける展開も期待される。

以上5編の論文の他に、これまでの特集と同様に、国民性調査を開始した1953(昭和28)年以降に統計数理研究所国民性調査委員会・国際比較調査委員会の委員および共同研究者によって、国民性調査・国際比較調査研究に関連して執筆・発表された文献と資料(新聞記事を含む)を可能なかぎり収集しその目録を掲載した。

なお、第13次全国調査の実施は主として統計数理研究所調査科学研究センターの経費による。また、調査企画の段階では統計数理研究所共同研究プログラム(25-共研-1033)の助成を得た。

最後に、60年以上にわたりこの国民性調査研究をつづけてこられたこと、また『統計数理』において5度目の国民性調査特集号を組むことができたのは、ひとえに統計数理研究所内外の関係者の方々のご支援の賜であり、これらすべての方々にあらためて御礼を申し上げる。今回の特集が、今後の日本人研究や統計科学研究の発展に寄与できるだけでなく、統計数理研究所の調査科学NOE(Network Of Excellence)活動のさらなる展開構想である調査科学リサーチ・コミュニティ形成の一助になることを願っている。

参 考 文 献

- 中村 隆, 前田忠彦 (2015). 日本人の国民性調査第13次全国調査, よろん (日本世論調査協会報), **115**, 62-71.
- 坂元慶行 (1995). 「特集 日本人の国民性調査」について, 統計数理, **43**(1), 1-3.
- 坂元慶行 (2000). 「特集 統計的日本人研究の半世紀」について, 統計数理, **48**(1), 1-2.
- 坂元慶行 (2005). 「特集 日本人の国民性調査50年」について, 統計数理, **53**(1), 1-2.